

あはれなるもの 孝ある人の子。よも男の若きが、御嶽精進したる。たて
圍つむじ、しち行ひたる晝の類。じみじめはれなり。むじまつき人なむの
目覚まして聞くらむ。思ひやる。詣るほむのめりたま。いかならむなむ。
しつみ怖ちたる。平らかに詣で着きたる。いせ。こゝ A 烏帽子
のたまなむ。少し人わらぎ。なほいみじき人と聞ゆむ。じまなむ。し
れいこそ詣り知りたね。

右衛門佐直孝といひたる人は、「あぢきなきもの」なり。ただ清き衣を着て詣
でむ。なむじつがあらむ。必ずしもあやうして詣りしむ。御嶽のむじの
たまはじ。よ。三月のじま。紫のこゝ襦袢指貫。白き襦。山吹のこみ
じつむ。あぢきなきなむ。隆光が主殿助なるは、青色の襦。紅の衣
すりもゆるかしたる水干といふ袴を着せて、うちを繞り詣りたりける。帰
人も、今詣りる。めづらむ。あぢきなきもの。たぐ。昔のじのじ
かかる姿の人見えたり。よ。あぢまじがりしを。四月。ロ。帰つ。六
月十日のほむ。筑前守の辞せじになりたり。いせ。い。言ひける。だが
は。ちも。聞。え。しか。じ。は。あはれなる。よ。は。あはれ。御嶽のこと
なり。

(改ページ)

問題 全て適切な漢字で、その他採点者を考え込ませるような回答は問答無用で不可。鮮やかに回答せよ。

- 一 傍線部「あはれなるもの」の意味を答えよ。また、「一重傍線部」なる」を文法的に説明せよ。
- 二 傍線部「孝ある人の子」とは、どのような行動をする子のことが、具体的に答えよ。
- 三 傍線部「よき男の若きが」を口語訳せよ。また、助詞を抜き出してその種類と、文法的働きを答えよ。
- 四 傍線部「御嶽精進したる」について、「御嶽精進」の読みを答えよ。

また、「たて」は連体形であるが、「」の場合のように文末の活用語を連体形にする。よ。文法的に何と呼ぶか。答えよ。
五 傍線部「たて隔てゐて」を口語訳せよ。また、「あ」の終止形と、活用の型、及び活用形を答えよ。

- 六 傍線部「うち行ひたる晝の類」について、全体を口語訳し、「類」の読みを答え、助動詞を抜き出し、文法的意味を答えよ。
- 七 傍線部「むつまじき人なむの」について、「むつまじき人」の意味を答えよ。また、「むつまじき」と「の」を文法的に説明せよ。
- 八 傍線部「目覚まして聞くらむ」思ひやる」を口語訳せよ。また、助動詞を抜き出し、文法的意味を答えよ。
- 九 傍線部「いかならむなど」を品詞分解して文法的に説明せよ。また、口語訳せよ。
- 十 傍線部「平らかに詣で着きたる」を口語訳せよ。また、「一重傍線部」に」を文法的に説明せよ。
- 十一 空欄Aには、「結構なことだ」「立派だ」の意味の『め』から始まる語が入る。空欄に入れるべき最も適当な形容詞一語を答えよ。
- 十二 傍線部「烏帽子」の読みを答えよ。

- 十三 傍線部「少し人わらぎ」を口語訳せよ。また、形容詞を指摘し、文法的説明をせよ。
- 十四 傍線部「なほいみじき人と聞こゆれど」を口語訳せよ。
- 十五 傍線部「こよなく知りたれ」を口語訳せよ。また助動詞を抜き出し、文法的意味、活用形、及びその活用形である理由を答えよ。
- 十六 傍線部「右衛門佐直孝といひたる人は」について、「右衛門佐」の読みを答え、助動詞を抜き出して文法的意味を答えよ。

また、この人物は、ある人物の夫であるが、ある人物とは誰か。答えよ。
十七 傍線部「あぢきなきことなり」を口語訳せよ。また、助動詞を抜き出して文法的意味を答えよ。
- 十八 傍線部「ただ清き衣を着て詣でむ」について、品詞分解をして文法的説明をせよ。また、口語訳せよ。このあたり大事。
- 十九 傍線部「なむじつがあらむ」について、「なむじつ」の元の形を答え、全体を口語訳せよ。また、活用語を指摘し、活用形を答えよ。
- 二十 傍線部「必ず」のたまはじ」について、副詞を抜き出し、呼応する語を指摘せよ。全体を口語訳せよ。

助動詞を抜き出して文法的意味を答えよ。敬語を抜き出して文法的に説明せよ。
また、「あやうして」と同様の意味で用いられている語をこれより前から探し、文中からそのまま抜き出せ。
- 二 傍線部「三月のじま」について、「三月」の読みと「のじま」の意味を答えよ。
- 三 傍線部「指貫」「襦」及び「山吹」の読みを答えよ。
- 四 傍線部「いみじむゆるあぢきなきなむ」を口語訳せよ。また、形容詞を抜き出して文法的に説明をせよ。
- 五 傍線部「紅」「水干」及び「袴」の読みを答えられない奴は失格。
- 六 傍線部「うちを繞り詣りたりけるを」を、主語を補って口語訳せよ。また、助動詞を抜き出して文法的説明をせよ。
- 七 傍線部「今詣りるも」は、ある語を省略した表記となっている。その語を補った完全な形を答えよ。
- 八 傍線部「めづらむ、あぢきなきもの」の意味を答えよ。また、誰が、何についてこのように感じたのか、本文に即して説明せよ。
- 九 傍線部「すべて見えたり」を口語訳し、助動詞を抜き出し文法的意味を答えよ。また、副詞を抜き出し、呼応する語を答えよ。
- 十 傍線部「あぢまじがりしを」を品詞分解して文法的に説明せよ。また、全体を口語訳せよ。また、「四月」「六月」の読みを答えよ。
- 三 傍線部「げに」言ひけるにだがは。ちも。聞。え。しか」を品詞分解して文法的説明をせよ。また、全体を口語訳せよ。
- 三 傍線部「に」「ね」及び「なり」について、それぞれ文法的に説明せよ。

一 意味 = 「しみじみと感動するもの(要約して)感動させられる」も可。同義可。

説明 = 「形容動詞ナリ活用』あはれなり』連体形の活用語尾』(『なり』の識別。大事「説明せよ」問題では「も必須」)
二 行動 = 「親の喪に服する子のこと』(単に「親孝行なり」も可。「〜こと』で結ぶ。「。なしは不可」)

三 訳 = 「身分が高い男で若い男が」 助詞 = 「の・格助詞・同格」が・格助詞・主格(格助詞の同格用法「よき」は「身分が高い」)
四 読み = 「みたけそひ』(歴史的仮名遣「みたけ』可)
文法的呼称 = 「準体言(の用法)。(活用語の連体形を体言のように使う用法。直後に体言が補える。同じでは「い』なり)』

五 訳 = 「周囲と隔離した部屋に座った(脚注に従う)。「ある」は原則として「いる」ではなく「座る」)
終止形 = 「ある」 活用の型 = 「ウ行上二段活用」 活用形 = 「連用形(上二段動詞は「ひ・い・き・に・み・ある」)

六 訳 = 「勤行をしている明け方の礼拝(「行ふ」は出家している人がすると「修行、出家していない人がすると「勤行」なので注意)
読み = 「ぬか(頭を地につけて礼をする)よき(ぬかひく)。」 助動詞 = 「たる・存続(断定)たり」との区別もできるように。
七 意味 = 「親しい女性」(『むつまじ』とも。主に女性に対する言い方)
「むつまじき」 = 「形容動詞ク活用』むつまじ』連体形。(『むつまじ』と「かどはなじ」)。「の」 = 「主格の格助詞」

八 訳 = 「今(今日)目を覚まして聞いているのだらうと思ひやる(「こゝろ・気持)」 助動詞 = 「らむ・現在推量(「今(今日)聞いているのだらう」)
九 品詞分解 = 「形容動詞ナリ活用』いかなり』未然形』いかなら』+推量の助動詞』む』連体形』む』
訳 = 「いつであらうかなど』(『いついかなり』は通じないが「いかなり」は形容動詞。「いかなら』が主語にならなむ)。

十 訳 = 「無事に参詣した」 説明 = 「形容動詞ナリ活用』平らかなり』連用形の活用語尾(「平らかなり」で「無事だ」たる元)。
十一 空欄補充 = 「めでたけれ(め)で始まり賞賛の意をもつ形容詞は「めでまし』「めでた』「めでた』「めでた』「めでた』「めでた』
めどまし = 「目が覚めるほむ・思ひのほか』心外だ・立派だ』(良い意味にも悪い意味にも使)。
めでたし = 「通常・ほかと違って新鮮で』すばらしい・賞賛すべきだ』(主として良い意味に使)。
めでたし = 「素晴らしくよみて』立派だ・賞賛すべきだ』(良い意味に使)。
めやすし = 「見ていて抵抗がなく』見た感じがよい・見た目がよい』(「悪くなく」程度の意)

比較等ではなく純粹に「無事に参詣した」といつ行為を賞賛しているので「めでたし」を選ぶ。係助詞「こそ」があるので已然形で。一般に「空欄には』が入る。適当な形に入れて入れよ。系の問題は係助詞問題」ぞ・なむ・や・か』は連体「こそ」は已然)
十二 読み = 「えほじ』(「えほじ』可)

十三 訳 = 「すこしみつともない」 形容詞 = 「人わろき・形容詞ク活用』人わろし』・係助詞』ぞ』の結びとなつてゐるため連体形。
十四 訳 = 「やはり身分が高い人と申し上げても(「なほ」 = 「やはり」)聞ゆれば』言ひの謙讓語「聞ゆ」の已然形)。
十五 訳 = 「ひどく粗末な恰好で参詣するの聞ひである(「ひどく」程度がはなはだしく違つてゐる。「やする」粗末な様子だ)。
助動詞 = 「たれ・存続・已然形」 理由 = 「係助詞』こそ』の結びとなつてゐるから。(理由説明は「〜から』「〜」も)

十六 読み = 「うえものすけ(うえもん(えもん)も可といえは可)すけ』は次官。かみ・すけ・じやう・さかた。大事)
助動詞 = 「たる・完了」 誰の夫か = 「紫式部(夫は藤原重孝。この記述がもとで清少納言に敬意をもつようになった)か。
十七 訳 = 「しまらないことだ(「あぢきなき」 = 「しまらないことだ・興ざめた)。」 助動詞 = 「なり・断定」

十八 品詞分解 = 「副詞』ただ』+形容詞ク活用』清し』連体形』清き』+名詞』衣』+連用修飾の格助詞』を』
+力行上二段活用動詞』着る』連用形』着』+単純接続の接続助詞』て』+タ行下二段活用動詞』詣つ』未然形』詣で』
+仮定の助動詞』む』連体形』む』+逆接の接続助詞』し』
『し』を格助詞として用ひてゐるが、冒険したくなご人は探偵者に探偵基準を確認してあへんじ)。

十九 元形 = 「なごいひら(「なごいひら」)「なごいひら(母音連続回避)」「なごいひら(撥音便)」
「なごいひら(連濁)」「なごいひら(撥音無表記)」。一部推測。日本語は複合言語を作るとき、前の語の末尾が撥音(ン)であった場合に、それにつく語の語頭が濁音化する現象がありまして、例えば「源+氏+當」は「ゲンシホタル」ではなく「ゲンシボタル」。「恩田」「仙田」「神田」「本田」の「田」は「すれま」だ)。
訳 = 「何とこのことがあるのだらうか、いや、何もありません(「又」は語なので「〜」から訳す)。

活用語 = 「あら・未然形」む・連体形」
二十 副詞 = 「よも・じ・わろ・じ』(「じ』大入気) 訳 = 「まさか必す粗末な恰好で詣でよと、御寮は決しておしやらないのだらう」(『なまじ』打消語)「む」も「か」も「なごいひら」打消語)で「決してない)。」 助動詞 = 「し』打消推量」

敬語 = 「のたまは』言ひの尊敬語」のたまは』の未然形で、言孝から御寮への敬意。「同義語 = 「やつて(聞かれるかも)。
二二 読み = 「やまじ(常識して)じ)。」 意味 = 「月末(単に「末」は不可)。
二三 読み = 「たいへん仰々しいものなぞを着し(「おひろおひろこ」 = 「おおけだ」「仰々こ)。」

形容詞 = 「いみじつ・形容詞シク活用』いみじ』連用形ノ音便 おひろおひろこ』形容詞シク活用』おひろおひろこ』連体形」
二四 読み = 「このものすけ(「このものすけ」)「が」 = 「同格の格助詞」「なる」 = 「断定の助動詞の連体形」
二五 読み = 「くれない(くれない)・すいかん・はがま」

二六 訳 = 「言孝と隆光がふたり続いて参詣したつたが、 助動詞 = 「たり・完了」ける・過去」

【中途半端で申し訳ありませんが、続きの解答は「後半」のプリントの解答編の先頭に設置しますのべ、そちらをぜひ参照してください】

男も女も、若く清けなるが、いと黒き衣着たること A。九月(い)

もり、十月一日のほどに、ただあるかなきかに聞きつけたるきりぎりすの声。鶏の、子いだきて伏したる。秋深き庭の浅茅に、露の、いろはる玉のやつにて置きたる。夕暮れ、曉に、河竹の風に吹かれたる。目覚まして聞きたる。また、夜などもすべて。山里の雪。思ひかはしたる若き人の仲の、せく方ありて、心にもまかせぬ。

問題

- 一 傍線部「若く清けなるが」について、品詞分解して文法的説明をせよ。
- 二 空欄Aに入れるべき最も適切な語を答えよ。パターンで分かるはず。
- 三 傍線部「九月」「十月」の読みを答えよ。
- 四 傍線部「ただきりぎりすの声」を口語訳せよ。
- 五 傍線部「浅茅」の読みを答えよ。
- 六 傍線部 削除（「こ」を文法的に説明せよ。）
- 七 傍線部「せく方ありて、心にもまかせぬ」を口語訳せよ。また「ぬ」を文法的に説明せよ。
- 八 二重傍線部「たる」（七箇所）について、それぞれの文法的意味を答えよ。
- 九 この作品の文学的ジャンル、作者、作品名、及び成立時期をそれぞれ漢字で答えよ。

解答編【前半】の解答のあふれた部分を先に配置しています。

二七 省略語補充 = 「今詣つる人も」「者」も可。準体言の用法)

二八 意味 = 「珍しく不思議なこと(できごと)」に 説明 = 「御獄に参詣して帰る人や「わ」から参詣する人が、言孝・隆光親子の参詣の服装の異様さについて、珍しく不思議なことだと感じた。(「〜と感じた。」で結ぶ。「。」「必須。)

二九 訳 = 「いつせよ、昔からの山」に「このよつな姿の人は見えなかつた」 助動詞 = 「なり・打消、つ・完了」

三十 品詞分解 = 「ラ行四段活用動詞『あさましがる』連用形『あさましがり』+過去の助動詞『き』連体形『し』」
+ 単純接続の接続助詞『を』(「が」は名詞・形容詞ク活用の語幹・形容詞シク活用の終止形について動詞化)

三十一 読み = 「驚きあきれたが」「あさまし」 = 「驚きあきれるばかりだ。この訳し方覚える。」 読み = 「つつき・みなつき」
活用語 = 「辞せ・サ変動詞『辞す』未然形・過去の助動詞『き』連体形、なり・ラ行四段活用動詞『なる』連用形、たり・完了の助動詞『たり』連用形、し・過去の助動詞『き』連体形」

三二 品詞分解 = 「副詞『げに』+ 八行四段活用動詞『言ひ』連用形『言ひ』+過去の助動詞『けり』連体形『ける』」
+ 連用修飾の格助詞『に』+ 八行四段活用動詞『違ひ』未然形『違ひ』+ 打消の助動詞『ず』終止形『ず』
+ 詠嘆の終助詞『も』+ 引用句を受ける格助詞『と』+ ヤ行下一段活用動詞『聞こゆ』連用形『聞こえ』
+ 過去の助動詞『き』已然形『しか』係助詞『こそ』の結びのため。

三三 訳 = 「なるほど、言いたくことに違わぬ」なあと評判になつた(「聞こゆ」 = 「評判になる」。最重要古語。語義多数。辞書参照。)

【11】より「後半」の解答編

一 品詞分解 = 「形容詞ク活用『若く』連用形『若く』+形容動詞ナリ活用『清けなり』連体形『清けなる』+主格の格助詞『が』」
二 空欄補充 = 「あはれなれ」(段のタイトルが「あはれなるもの」であることから容易に分かる。「こそ」があるので已然形で。)

三 読み = 「ながつき・かなつき」「かみなつき」可。「〜や」は表記が完全に間違っているの不可。)

四 訳 = 「わづかにあるかないかへらうに聞きつけた」
「ただ」 = 「たつた」「わづかに」「きりぎりす」 = 「「オロキ」に「いほんぬ」 = 「キラキリス」)

五 読み = 「あはれ」(あはれ)

六 説明 = 「格助詞『にて』の一部」(もももとは格助詞「に」+ 接助「て」ではあったが一語として扱ふ。格助詞)

七 訳 = 「邪魔をする者があつて、思い通りにならないこと(が)しめじみと感動する」(「あはれなり」を省略。「塞く」 = 「邪魔する」)
説明 = 「打消の助動詞『ず』連体形」

八 「たる」判別 = 「衣着たる」・存続『聞きつけたる』・完了『伏したる』・存続『置きたる』・存続『吹かれたる』・存続『聞ききたる』・存続『思ひかはしたる』・存続『置きたる』・存続『吹かれたる』

九 ジャンル = 「随筆」 作者 = 「清少納言」 作品名 = 「枕草子」 成立時期 = 「平安時代(中期)」
(「古典三大随筆」は「清少納言『枕草子』、鴨長明『方丈記』、兼好法師『徒然草』。)

赤シートを使って暗記・確認用としていた。

急傍線・記号は 注意すべき表現(体言・用言ほか) 助動詞 助詞 係り結び(または係り結びの消滅・係り結びの省略)

尊敬の動詞

尊敬の助動詞

尊敬の補助動詞

謙譲の動詞

謙譲の補助動詞

を表す

しみじみと感動させられるもの、親孝行な人の子。身分の高い男で若い男が、御嶽精進をしている様子。

あはれなるもの、孝ある人の子。よき男の若きが、御嶽精進したる。

他の部屋と隔った部屋に座って、勤行している明け方の礼拝は、たいへん趣き深い。親しい女性などが

たて隔てゐて、うち行ひたる暁の額、いみじくあはれなり。むつまじき人などの、

今日目覚ますに聞かしてゐたかと思ひやる様子。参詣する人々の様子が、どうもあつたやうに、しみじみ心配してゐるが

目覚まして聞かすに思ひやる。誦するほどのあつたやうに、いかならむなむ、しみじみ怖ぢたるに、

無事に到着した人は、たいへん立派な人である。烏帽子の様子が、少しもよまぬ。

平らかに誦で着きたるこそ、いとめでたけれ。烏帽子のよまぬぞ、少し入るも。

やはり身分が高い人と申し上げても、ひどく粗末な格好で参詣するものだと聞いてゐる。

なほ、いみじき人と聞かぬれむ、よまぬやせめてこそ誦しと知りたれ。

右衛門佐言孝といった人は

「しまらないことだ。ただ浄衣を着て参詣したとしても、何となくよまぬやうな感じが、いや、何もなし。

右衛門佐言孝といひたる人は、「めぢきなまじことなり。ただ清き衣を着て誦でむむ、なむじよかあらむ。

必ずしも、あやこひつ誦しよむ、御嶽をたのたまはて。」と、三月末に、

紫のたいそつ濃く指貫、白く狩衣、山吹襲のたいへん仰々しいものを着て、

紫のいと濃き指貫、白き襦、山吹のいみじくおどろおどろきなぞ着て、

主殿助である隆光には、青色の狩衣、紅の衣、入り乱れた模様を派手に摺り染めにした水干袴を着せて、

隆光が主殿助なるには、青色の襦、紅の衣、すりもどろかしたる水干といふ袴を着せて、

一人続いて参詣した。そのだが、帰る人も、これから参詣する人も、珍しく、不思議なことに、

うち続き誦でたりけるを、帰る人も、今誦するも、めしつらう、あやこひやう、

「こひれ、昔かしの山に、このよくな姿の人は見えなかつた。」と、驚きおきたが、四月一日に帰って、

「あやこひ、昔よりの山に、かかる姿の人見えやう。」と、あやまじがりしを、四月一日に帰って、

六月十日のほかに、筑前守の辞せしになりたりしに、言ひけるに、たがはずもと聞かすは、

六月十日のほかに、筑前守の後任になった人は、言つたことに違わないかと評判になった。

これは、しみじみと感動させられることではなかつたが、御嶽の話のこひどおぬ。

これは、しみじみと感動させられることではなかつたが、御嶽の話のこひどおぬ。

これは、あはれなることにはあらむ、御嶽のこひどおぬ。

あはれなるもの(後半) 本文 口語訳

赤シートを使って暗記・確認用にご利用下さい。

急傍線・記号は 注意すべき表現(体言・用言ほか) 助動詞 助詞 係り結び(または係り結びの消滅・係り結びの省略)

尊敬の動詞 尊敬の助動詞 尊敬の補助動詞 謙譲の動詞 謙譲の補助動詞 を表す

男も女も、若く綺麗な人が、たいそう黒い衣を着ている様子が趣き深い。

男も女も、若く清けなるが、いと黒き衣着たるこそあはれなわ。

九日月末 十月一日のほどに、ただあるかないかに聞きつけたおまの聲。

九月つごもり、十月一日のほどに、ただあるかなきかに聞きつけたるきりぎりすの聲。

鶏が、子を抱えて伏せている様子。秋が深い庭の浅茅に、露が、色とりどりの玉のやうにおりている様子。

鶏の、子いできて伏したる。秋深き庭の浅茅に、露の、いろいろの玉のやうにて置きたる。

夕暮れ、明け方に、河竹が風に吹かれて、いるのを、目を覚まして聞いていたこと。また、夜なごます入て。

夕暮れ、曉に、河竹の風に吹かれたる、目覚まして聞きたる。また、夜なごます入て。

山里の雪。想い合っている若い人の恋愛の、邪魔をする者があつて、思い通りにならぬ様子。

山里の雪。思ひかはしたる若き人の仲の、せく方ありて、心にもまかせぬ。

特に連体形で文が終始している場合に補われる体言・表現をきちんと確認しよう。

例：「春はあはれのことをかじ。ちやちや白くなりゆくことをかじ。山ははやく明かりつくことをかじ。

紫だちたの雪の細くたなびきたることをかじ。夏は夜いとをかじ。月のうきはならぬことかじ。…」この段は「然」「あはれなご」。

「誦」「謙譲語」があるが、「こ」では取り立ててマークするようにはしてない。